

シリーズ2、庭木に利用する樹種の特徴と管理① —クチナシ—

日本樹木医会富山県支部
樹木医 西村 正史

6月から7月上旬の頃に住宅街を歩いていると良い香りが漂ってくれば、それはクチナシの花の香りです。秋のキンモクセイや早春のジンチョウゲとともに香りの良い花木の代表選手です。

1. 特徴

この花木は、アカネ科クチナシ属の常緑樹で、大きくなっても1~3m程度のため、庭木や垣根などに適しています。日本では静岡県以西の暖かい地域に分布しています。本県でも冬の雪や寒さの対策をとれば植えることが出来ます。富山県中央植物園では、その対策をとっていますので、元気に育っています(図1)。

クチナシの花びらは6枚で、開花すると純白になります(図2)。少し遅れて咲く八重咲きの園芸品種もあります(図3)。11月になると黄紅色の実となります(図4)。この実は翌年の2月頃まで枝に着いており、おもしろい形をしていることもあり、花だけでなく実も十分楽しむことができます。

なお、実からは黄色の色素がとれ、布地を染めるのに使われたり、栗きんとんや沢庵など食品の色付けに使われたりします。

2. 維持管理

日陰でも育ちますが、花を咲かせるためには日当たりがよい場所で、極端に乾燥しない腐植質に富んだ土壤に植えてください。成長するに従い、自然に樹形が整うので、基本的には剪定の必要はありません。どうしても剪定をせざるをえない場合は、開花後なるべく早い時期に行

ってください。それ以降になると翌年の花芽が形成されますので、以降の剪定はさけてください。



図2 花 (2012年6月28日撮影)



図3 八重咲きの園芸品種 (2012年7月12日撮影)

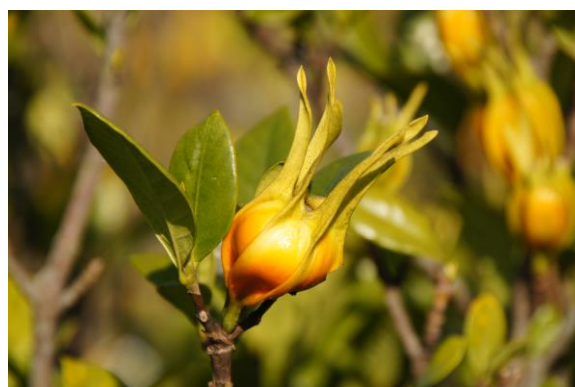


図4 実 (2011年11月17日撮影)



図1 クチナシ (2009年6月25日撮影)

※これらの写真は富山県中央植物園で撮影したものです。